

晩年の犬養毅に関する一考察（Ⅰ） — 白林荘、孫文移柩式、政友会総裁 —

時任 英人

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2015年10月1日 受理)

はじめに

犬養毅(号・木堂)は、1925(大正14)年5月革新倶楽部を政友会に合同させると同時に政界から隠退した。しかしながら、熱烈な地元の支持者たちに補欠選挙で当選させられて4年後〔註1〕政友会の総裁に就任したが、この期間の犬養の動きについては、あまり知られてない。というよりも、その期間の犬養自身がそれまでのように新聞などに掲載されるほど政界で表立って活動しなかったことが原因の一つである。それに実際、この期間政界の表舞台から身を引き、東京と信州の別荘「白林荘」の間を往復することに時間を費やしていた。

そこで本論(Ⅰ)では、犬養毅の別荘である白林荘について、そのことが犬養にとってどんな意味をもつかについて検討してみたい。

近代日本の政治家が自分の別荘を持つのは、珍しいことではない。政治家たちはお気に入りの別荘を持ち、そこで時間を過ごすことになったのであろうが、犬養の場合は別荘を持ったのが60歳を過ぎてからである。そのほぼ9年後日本政界での地位が突然高くなったため、その前後に犬養が肝入りで造った別荘の意味を検討する必要があると思われる。

そうした視点から考えた場合に重要になるのが白林荘のことである。つまり、犬養は政界を隠退したのち、息子の健の長女で、最愛の孫である道子とこの白林荘で時間を過ごす機会が増え〔註2〕る一方で、この時期犬養は、ここで英気を養い、再度政界へ復帰するための構想を練るとともに、自分の政治的人生についてもいろいろ回顧して整理したりしていたはずだからである。となると、この時期は晩年の出発点を準備したという点で重要な意味をもつものと思われる。

つづいて(Ⅱ)では、その後政友会の総裁に就任するに際しての引き出された事情とその際の犬養の心境を中心として検討することにするが、併せて政友会の総裁に就任する直前に、南京で行われた孫文の移柩式に頭山満を始めとする多くの関係者と参加した件についても検討する。というのは、この時期中国では次第にナショナリズムが高まり始め、中国の中心人物の一人となる蒋介石をめぐる動きが目立ち始め、そういう中で蒋介石との面会を含め犬養は自分が長年に亘って関わってきた中国事情を観察することも目的として中国を訪れたからである。しかも、当時は犬養が所属する政友会の田中義一政権は積極的な

対中国政策を推進しつつあるため、それが犬養の考える中国政策観と異なっていたことから、余計自らが中国を視察することで、中国国内の実態を知りたかったようである。

とはいえ、当時犬養は党の長老であったため、政権と異なる発言や行動を自制してまで、ある意味では飽く迄も視察に徹する必要があったものと思われる。この点も併せて検討することにする。

1. 白林荘の建築

白林荘について犬養の側近中の側近であった古島一雄は、次のように述べている〔註3〕。

信州の富士見と云へば、今は誰でも知つて居るが、有名になつたのは、犬養木堂翁が白林荘で怪我をしてからである。信州と云へば先づアルプスを連想する。其高原で、犬養が崖から落ちて大怪我をしたと伝えられたから大変だ。全国の木堂ファンは固より、見舞の電報や手紙が殺到して、富士見の郵便局は、開設以来初めて目を舞はした。

古島によると実際は大怪我ではなく、別荘内の小道で1メートル弱の窪地に落ちそうになったのを、腰をひねって踏みとどまったために筋が違った程度であったらしい。その後遺症で床返りをするのも困難なほど辛かったようだが、流石に犬養らしく一言も「痛い」と言わなかったので、地元民は時々怪我をしてもらうとこの地の宣伝になると冗談を言っていたという。

犬養が初めて富士見に行ったのは1922（大正11）年の春で、先に同じ所に別荘を持った、日露戦争前から付き合いがあった政友会の小川平吉に「・・・高原の自然が雄大で美しい上に、土地が高燥で、軽井沢のように湿気がなく、健康にもいい」と勧められ、大韓帝国で最大の政治結社の一進会を創設した宋秉畷が所有していた、当時「朝鮮別荘」と言われた所を借りたのが最初である〔註4〕。

犬養は富士見を初めて訪れると直ちに気に入ったようで、その年の7月になると、慶応義塾時代から共通の趣味の上の友人であった、日本画家の榊原鏡硯とその家族から誘われると、早速同行することにした。そのとき明治十年代から親交のあった出版社博文堂社主の原田庄左衛門にも同伴することを求めたようである〔註5〕。

鏡硯夫婦并第三女（三人丈けの趣）来二日信州の高原ニ赴くとの事ニ付小生も成るべく繰合同伴する筈貴兄何とか繰合被成候ハ、御同行致度此炎暑ニ大坂ニ帰りて紅塵中ニ走り廻るハ不養生の尤も甚しきもの也御奮發可被成時刻ハ鏡硯より定め来る筈鏡〔鉄硯〕夫婦ハ婢を召連れざる趣ニ付小生貴兄と兩人ハ夜泊丈けハ上諏訪の宿

屋に出懸けて翌日又々富士見二帰りてもよし如何

この時犬養は原田とともに富士見に出かけ、8月の初めから鏡硯らと過ごした。そのことを明治時代から親交のある、漢学者であり書家でもあった長尾雨山に報告し、「月初より当地ニ避暑致居候 海拔三千五百尺の高原にて暑を知らぬ処ニ候 鏡硯夫婦并博文堂も同寓ニ候」〔註6〕と述べているほどであるから、よほど居心地が良かったのであろう。この居心地の良さは、犬養の心をさらに惹きつけたようで、このことについて遅れて到着した犬養の弟子で、のちに定評ある『犬養木堂伝』を著した鷺尾義直が書いている。鷺尾は、1922年8月7日の午前6時過ぎ、富士見駅に到着した〔註7〕。

駅前の店屋で、宋伯爵の別荘と訊ねたら「あゝ朝鮮別荘ですか」と云ひ乍ら、行李を指して「三丁位もあるでせう」といふ。

私は、可なり重い荷物を両手に提げて、ぶら〜出かけた。

モウ三丁どころではないと思ふ処で、途中の人に訊ねると「さうですね。三丁位のものでせう」と言ふ。怒る訳にもゆかない、苦笑しながら私は又途を辿つた（中略）

坂を登りつめると右手に当つて、巍然——と形容してもいゝ位の高閣が聳え立つてゐた。外に家が一軒も見えない、兎も角も此処を敲して見ることにした。

春水満四訳。夏雲多奇峰。

秋月揚明輝。冬嶺秀孤松。

かういふ門柱が建つてゐる。此処かもしれない。

案内を乞ふと、十六七歳の品のいゝ少女が現れて、無言で先きに立つて行く。私も無言で其後に従つた。此処は小川平吉氏の別荘であつた。

朝露滴る松間の径を——といふよりは、芝生の中を一二丁行くと、平屋造りの一屋の側に出た。そして私は、そこに早くも硝戸越しに此方を眺めて居られる木堂先生のお姿を見た。

少女が黙礼して去ると、代つて玄関に現れた巨漢、それは雲処山人新田興さんであつた。新田さんとは、当時まだ熟識といふ程ではなかつたが、面交はあつた。気軽に荷物などを受取つて呉れて「さあ〜」といふ。

榊原鐵硯翁、同夫人、令嬢等に迎へられて座に通じ、恭しく木堂先生に御挨拶を申上げた。そして早速朝食を頂いた。長方形の食卓の上に、半洋式の御馳走の列べられたのを今に記憶してゐる。・・・

斯くして私は、富士見山荘の御仲間入りをしたのである。今は世に名高き白林荘の出来る前年のことである。

ここに鷺尾が呼ばれたのは、出版社の博文堂の主人が犬養の名著〔註8〕を刊行したい

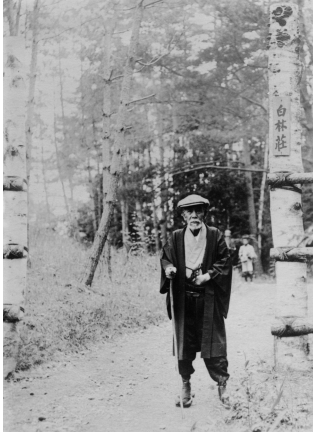


図1 門前（白林荘にて）

ということを犬養に告げると、「夏は信州富士見に一ヶ月程滞在する予定だ、自分で筆を執るのは億劫だが、誰か筆記でして呉れたら」というので、「鷲ノ尾」という名前で鷲尾が指名されたため、富士見に来たのであった。

ここには、小川平吉が訪れたりもした。そして鷲尾は犬養のお供をして、高原の最も高い頂に登るとそこからは富士山がよく見え、この時の犬養は「低徊願望去る能はざるもの、如くであつた」というから、余程気持ちに周りに溶け込んでいたものと思われる [註9]。

ここまで心を和らげる場所が富士見であったようで、ちに別荘が完成してから執筆した書簡には、このことが記されている。たとえば、岡山県の地元の写真家三宅希峯に宛てた「信州富士見ハ甲信の分れ嶺にて風景ハ雄大也、南ニ富士を詠め東ハ八ツケ岳連山、西南ハ南アルプスの連山、北ハ遥ニ日本アルプスを控へたる三千二百尺の高原にして敵庵ハ松原を背にしたる高台也」 [註10] という具合に、その光景を報告するほどであった。そこで、白林荘が完成したのちには、その絵葉書まで作成しようとしていた [註11]。

・・・写真数種一封、今日到着致候、白林荘実ニ上出来、頗る雅致を生し候 四阿亭 [白林荘の近辺に富士、八ツケ岳、南アルプス、日本アルプスを見渡すことが出来る小屋を指す] 図ハ貴意ニハ叶ハざるとの御申越なれど素人目にハ少しも欠点を見ず、此の絵葉書の出来るを楽み候・・・

つづけて、やはり三宅が絵葉書に使う予定の白林荘の写真を送ったのに対して、次のような書簡を出している [註12]。

・・・御送付の写真到着、家眷と共に展覧致し、一同感服致候是でコソ画也、天成美を写し得て妙也、敵廬各部の写真ハ都べて白林荘と題したし他日若し富士とか八ツケ岳とか外部の景を写したるものハ白林荘より観たる富士、又ハ何々と題したし老生、近日宮中の御慶事の電報ニ接すれハ即日帰京し、更ニ再び山荘ニ来る筈也、山荘ハ九月末より十月が真価の顕ハる、時也

そうした心境は、犬養の詩心を刺激したため、長年の趣味を共にする友人と出かけるようになるが、その中でも榊原鏡硯には、とくに心を許したようで、鏡硯の掛け軸に、犬養は中国の王臨川による次のような詩を書き込んでいるほどである [註13]。

吾白林荘 在南信山中 青松白樺 丹楓紅櫨
 無四時不佳 亦武陵仙境也 恨鉄硯妙手
 不画此光景耳 時昭和戊辰夏 京師甚多事
 吾独臥山中 不復耳世事 王臨川詩曰
終日看山不厭山 買山終待老山間 山花落尽山長在
山水空流山自閑〔傍線原文〕 吾近況如此

傍線部分が王臨川の詩である。この木堂の詩を戦後白林荘のオーナーとなった辰馬財閥の大番頭と言われた、参議院議員であった山縣勝見は次のように詠んでいる [註 14]。

吾が白林荘、南信の山中に在り。青松白樺、丹楓紅櫨、四時佳ならざるなし。また武陵の仙境なり。恨むらくは鉄硯の妙手、この光景を画かざるを。時に昭和戊辰の夏、京師甚だ多事。吾れ独り山中に臥す。復た世事を耳にせず。王臨川の詩に曰く、終日山を見て、山に厭きず。山を買って、老を山間に待つ。山花落ち尽くして、山長えに在り。山水空しく流れて、山自ら閑なり。吾が近況かくの如し

健と親しくしていた山縣は、その白林荘に諏訪の山中から掘り出した砥川石を研ぎだして、犬養が愛した上記の王臨川の詩を彫ったほどである。

さて、これほどまで気に入ることになる富士見に犬養は、1922年中何回か訪れたようで、寒くなった11月にも赴き、先述した原田に「富士見ハ現ニ積雪六寸也因テ満州旅行の冠物を用意致置候(兄のも準備せり)・・・ゴム靴ハ中ニ毛織が付けあるニ付冷クハなし日本製の長靴ハ雨水がシミ込み困るもの也殊ニ雪水にてハゴムの方がよろし冠物ハ鼻と耳を掩ふ様ニ出来居る也是ハ先年満州にて買ひたるもの也・・・晩迄ニ拙宅ニ来て著用せられたし」[註 15]と報告して、誘っているほどである。このとき信州に出かけた本来の目的は富士見青年会に出席するためであった。そうした機会を利用してでもこの地に寄りたかったのであろう。

2. 白林荘を必要とした理由

では、何故ここまで富士見に別荘を求めたかったのであろうか。原因は犬養の健康上のことが主因の一つであった。このことについても先述した古島が証言している。犬養は若い頃から40キロあるかないかの体重で、一時期は医者から肺が良くないという診断を受けたため、大磯付近で養生をしていた時代があった。医者の忠告を厳密に守ろうとする犬養は、冬に風邪にかかるのを恐れて、外出する時は必ず二頭に引かせた馬車を雇ったが、これは当時において贅沢と言われたため、批判の材料とされた。しかし最後は犬養の訪れる先が馬車が停車できるような場所がないため、間もなく中止した。



図2 老栗亭に腰掛け(白林荘にて)

富士見の話が出たという〔註16〕。

〔富士見の別荘予定地に〕往つて見ると、先づ八ヶ岳の裾野を曳いて居る雄大なる景色に撲たれた。三千三百尺の高原で、澄み渡る大空から受ける日光の直射が焼けつくやうな温度があつても、一たび木陰に入れば山々から吹送る天風が一点の湯気もなく、サラ〜として肌ざはりの爽かさが、成程こゝで紫外線に浴したら健康をよくするだらうと思はれた。

このように、この地に立ったときの犬養がもった印象を、古島は実にうまく表現している。

当時の近くの別荘地といえば早い時期から開けた、交通の便も良い軽井沢があったが、犬養にしてみるとそこで感じる「文化的の臭ひが鼻を撲つ」のに対して、富士見は都会人らしい姿さえ見当たらず、老若男女を問わず、皆が一様にモンペを穿いて「孜々として火山灰の瘦地で働いて居」り、その姿の「いぢらしさ、其田舎らしさ」〔註17〕に心を動かされたのである。そこで目撃したモンペを大変気に入り、「アレは面白い、山歩きにはも



図3 白松(白林荘の白松)

つて来いだ、それに書を書く時にも着物の裾が邪魔にならなくてよい」と言ったのを聞いた青年会の一人が新調して贈つたらしい。白林荘の犬養の写真にはモンペ姿が見られるが、それはこの時からのようである〔註18〕。

地元の青年も犬養が著名な政治家であるにも関わらず、面識を得ると、その親しみやすい人物であることに好印象をもった。この当時の犬養は、すでに70歳が近くなり目つきは相変わらず鋭かったが、それまでのようなギラギラした部分がかなり後退しつつあった頃であるため、出会う人たちが親しみを感じたとしても何ら不思議ではなかった。

それでいよいよ木堂は別荘を建設する場所の選定をすることにした〔註 19〕。

国道を隔て、富士見駅と相対する小高き松林がある。亭々たる赤松の中に、白樺もあれば落葉松もある。右を見れば八ヶ岳が各々其容を異にして屹立する。左を眺むれば入笠山から鋸山の連峯の上に、駒ヶ嶽が顔を出して居る。更に正面を見れば、富士が端然として遙に雲際に聳えて居る。此形勝の地を卜したのが白林荘である。彼はとうとう海から山に転向した。避寒の人は遂に避暑の人となつた。水を楽しむ智者が、山を楽しむ仁者となつた。

犬養にしてみると、海の風景と異なるものを山に見出し、惹きつけられたのであろう。出身の庭瀬は海に面していないため、上京するに際して船を使った時は犬養の心を興奮させ、その後政治家としての人生を始めてからも、そうした海に対する恋慕のような感情をもち続けていたであろうから晩年は健康を回復するためには、先述したように温泉がある海の見える風景に惹きつけられていたはずである。それが突然信州の高原に心変わりをしたのであるから、よほど心が動いたのであろう。

そこで、いよいよ建築を指揮してまで別荘を持つことにした。1923年には家族をつれて再度宋乗峻の別荘に出かけ、ますますこの地が気に入った。同年の2月24日には「夏期ニ間ニ合ふことハ困難なるべきニ付兎ニ角宋乗峻別荘を再び借用の事を小川氏（註 平吉氏）ニ申込置候但し未其返答を得ざれども大抵承諾してくれるべしと存居候 此処へ小生の家族ハ出懸る筈ニ候」として、すでに夏の信州の別荘を借用することを政友会の小川平吉に依頼したのち〔註 20〕、白林荘を建築するための設計図は富士見在住の人物に依頼し、大工も木材もすべて現地調達したようである。この時富士見で犬養の指示のもとに行動したのが、のちに当地の村長になる樋口隆次であり、樋口に対して次のように具体的に指示している。

まず、家屋については理想がある訳ではないが、子どもや近親の者を伴って行く場所を造るのを第一次計画とし、第二次計画としては東の方の崖に面した場所に「小生の書齋でも造る考」のため、木材は「普通のものにて成るべく安上がりなのが望」〔註 21〕であると述べている。これが同年2月24日である。

3月10日頃になると、家屋の設計図が出来あがり、それを青写真にして樋口に送る準備をし、その時に「木材ハ廉価のものにて作り度」としたうえで、建坪は総計が番人の住宅を含めて75坪になり、そのほかに薪炭などを入れる物置は便利な場所に造りたいという希望はあったが、これは当地の大工の設計で構わず、とにかく本当の物置小屋である、としている。つづけて、屋根は瓦を使うが、それは樋口に依頼するとしている〔註 22〕。この時大工が風邪を患ったことから工事が頓挫したため、細目は現地で決めるとして、4月2日になると早速富士見に行く予定にしていたが、福岡県の補欠選挙の応援に行くこと

になったため、同月の16、7日には行けると考えた。しかしながら、見積り書を持って大工が上京することになったが、詳しくは妻に「含め置」しておくので、打ち合わせをしてほしいと指示した。そして、「家屋ハ斜ニ立る筈即ち東南ニ向けて立る也故ニ玄関ハ西北ニ当ル事ニ候木材ハ松ニ致度 要するに費用を旨とし質素のものニ致度」〔註23〕と書いたが、同月6日には、行先の福岡県の筑後福島から16日か17日には富士見に行けるが、東京からは妻も行けるので、具体的日時については電報を打つ〔註24〕とし、同月13日には京都から、15日には名古屋から富士見に向けて出発するため、16日か17日には到着するはずだ〔註25〕と書き送っている。

富士見に到着すると、今度は、設計が「少々過大」となったので「甚困り居候何とかして少しく建築費を減する妙案ハなきや設計の上ニハ多少変更を加へても差支無之候」〔註26〕と書いている。樋口は要請に応じたようで、それについて5月11日に犬養は次のように書いている〔註27〕。

・・・御申越の木材、基礎工事、大工賃の外ニ屋根並建具を加へ候ても予算よりハ節減せられ候様ニ候是なれハ至極好都合ニ候小生ハ元来簡易の建築が希望ニ候処技師の設計ニ屈曲多かりし為め経費も増加したる次第ニ候小生の好みハ丈夫ニ出来さへすれば足る訳にて装飾ニ属す部分を成るべく省き費用一途のものニ致度考ニ候幸ニ諸君の御配慮にて建築費の節約が叶候ハ、此上もなきことに候集会せられたる諸君ニよろしく御礼を伝えたく御依頼致候・・・

また、松林に関する問題があったようであるが、これも樋口の尽力で解決したため感謝を述べたのち、「茅廬〔現在の母屋と思われる〕ハ極めて簡易のものを造る筈にて製図を頼置候 一日一日と後れ居候得共近日中ニハ出来可致候 井水ハ量少なきにハ少々失望致候得共本より一家の用にハ十分なるべしと推想致候」〔註28〕とし、夏期までには出来るようにしたいと述べている。

白林荘ができることと犬養は毎年4月には必ず出かけるようになった〔註29〕。というのは、当時は冬になると地中70センチまで氷結する所ではあったが、4月になると樹木を移植することができるからである。それまでいろんなことに関心をもち、多趣味の人物として知られていた犬養であったが、それらに加えて今度は庭造りという趣味ができた。

先述したように犬養は小さな体格だったからであろうが、大きなことが好きであった。これはその政治目標としての日本という国家の舵取りから日本と中国との間に経済共同体をつくることまで、いずれも大きなことであった。しかしそうした政治目標だけでなく、自分の身近な所にも大きな物を造ろうとした。たとえば、世論に袖下を貰ったから手に入れられたと批判されたことのある、かつて陸軍軍医総監に借りていた新宿の馬場下の邸宅の家には、かなり立派な石や池があったが、これに飽き足らないと感じた犬養は、その一

部分を改造までした。

その時にも犬養らしい準備があった。多忙な時間を割いて、まず庭園に関する東西の書物を蒐集し、つづいて樹木、害虫、土壌に関するものまで集め、それから頭の中に改造のためのプランを作成し、それに基づいて近所の植木屋を回って予算内で理想に合った木々を探し始める。そしてもっとも安い金額の自然らしい庭を造ったのである。如何にも犬養らしい。しかも出来上がったものは「和洋折衷」で「豪快でイヤ味」がない。馬場下の庭を見て、政界での犬養のパトロンの存在であった三浦梧楼が次のように評した [註 30]。

第一金をかけて居らぬのが此庭のよい処である。大隈〔重信〕の庭は、いかにも大名的で、鶴は放せるが、乃公の庭のやうに鹿を追出す事は出来ぬ。総じて金をかけると雅が却つて俗になる。山県〔有朋〕の小田原の別荘なども、竹であつてこそ風雅であるべき筈を、金にまかせて銅でこしらへて雅趣を打壊して居る。犬養は、金が出来ても銅の筈は作らぬだらう

犬養をよく知る三浦でしか言えない批評である。犬養と親しくしていた三浦は、憲政本党内部での抗争に際しては大隈重信に政治姿勢を明確にすることを求めたり、寺内正毅内閣が成立する直前には三党首会議を、そして清浦内閣期にもやはり三党首会議を開催させるために尽力していたが、いずれもが犬養の行動を支持するものであった [註 31]。

このような三浦の証言や先述した樋口隆次に対する書簡から考えると、初めから犬養が白林荘のプランを描いて、それに基づいて建設しようとしていたことから判断して、何から何まで思い通りにしたはずである。とすれば、ここは犬養にとって自らのアイデンティティを実感できる最高の場所となったのは言うまでもない。

晩年の犬養にとっていま一つのアイデンティティとなったのが健の娘の道子である。別



図 4 飛行機
(孫の道子と白林荘にて)

に住んでいた道子を敢て同居させようと企んでいるほどであったことから考えて、この白林荘で共に時間を過ごすのは道子以外に考えられない。それゆえ、この地を訪れるときは道子を同伴するか、東京から道子を呼び寄せるのが習慣となっていくのである [註 32]。

3. 犬養にとって白林荘がもつ意義

では、白林荘は犬養にとってアイデンティティを感じる場所だけにしか過ぎなかったのだろうか。一応、白林荘を訪れた時の犬養の心境について、犬養をよく知る鶴崎熊吉は、富士見の別荘では「閑雲野鶴」の境地を味わうことが出来たようだと言っている [註 33]。また犬養自身も、

次のように述べている [註 34]。

老生一両日中ニ信州富士見ノ高原ニ趣キ、八月中ハ逗留ノ筈ニ候、東京デハ朝カラ夕迄(夜丈ケハ面会セヌ規定)人ニツカマリ煩クテ堪ラヌ、故ニ避暑ニアラズシテ避人也

但シ田舎デハ村ノ論客ヤ小学校ノ先生ナドニ来ラレ是レモ困ル也

確かに白林荘では、その土地の人物と会話せざるを得なかったが、自ら「避人」と証言するほど東京にいる時に日々経験している人間関係の煩わしさから解放されていたのは事実であろう。

しかしながら犬養ほどの人物が、それだけで残りの人生を送ろうとしたとは考えられず、やはり中央政界の情報を多くの関係者から入手し、また自らも東京に足を運んでこれまでの側近たちと会話をしてきたことから考えると、やはり今後の政界に対する位置をどうするかということで頭の中は領されていたであろう。

原敬が評したように犬養は先に見える政治家である [註 35]。しかもその先読みは自分の政治的立場を有利にするためには際立つ次の例外を除いて、ほとんど使うことはなかった。その例外とは、大隈重信と松方正義の二人を提携させて内閣を組閣させたこと、憲政本党の抗争に際して最終的には自分が勝利を制する形で首尾よくうまく行ったこと(いずれも長続きはしなかったが)、1916(大正5)年の三党首会合の直後に寺内内閣を批判する形で議会を解散させ、憲政会と政友会が議席を減らすことになる選挙の露払いをしたことぐらいである。

この時期、犬養がもっとも先読みが出来なかったことが、政治家としての自分の晩年である。

息子の健によると隠退宣言を出した直後の犬養はそれまでと違って普通の老人の表情をしていたようである [註 36] が、果たしてその表情はその時の犬養の心境を映し出すものであったろうか。いや正確には、それで犬養は自分の政治家としての人生に幕を閉じようとしていたのであろうか。それとも少数政党の党首としての限界から一時的に逃避するための隠退劇としての政友会との合同であって、支持者や世論がまた再起を促すような事態でも来れば打って出ようと考えていたのであろうか。

この疑問に答えるのは簡単なことではない。それまでの経緯からみれば、確かに犬養は古島一雄の考えのもとに用意周到に隠退の準備をし、自分で資金繰りをしにくい政治家たちの将来を政友会に委ねることで、少なくとも彼らの政治資金の問題を解決した。それが実現したのために、そのまま政界にいと、彼らが慕ってついてくる可能性があるため政界から隠退までした。

また、隠退しないと、犬養についてきた政治家たちは、簡単にそれまでライバルとして



図5 白林荘にて

きた政友会との合同に賛成するはずもないからである。これで通常であれば、犬養を信じて共に行動してきた政治家たちの希望は断つことができる。ところが、地元岡山県の支持者たちが犬養を再選させると、その政友会に所属し長老の一人となった。しかしながら、もうかつてのように政党を主導できるような事態を復活するのではないかという期待を削ぐために、全く政界の表面に出ず、信州の片田舎の別荘を主たる隠れ家として過ごしたのであろう。

ここまでは、犬養と信頼してついできた政治家との関係である。

では、実際犬養の本当の心境は、いったいどうなのであろうか。つまり地元支持者たちが再選させると考えていただろうか。これは当初、自分の後継者まで指名したのであるから、その人物が当選を果たすことは予想されたので、一応政界の外部者として影響力を行使することは出来ると考えていたであろう。しかしながら、さらに踏み込んで政治家として衆議院で議席を失くし、一種の「政界浪人」として過ごすだけでいいと思っていたであろうか。

犬養は白林荘で過ごす時間が増えても、関心は中央の政界であったようである。それは、次節の田中義一との関係やついには政友会総裁に就任することを見ても明らかである。

4. 政界隠退後の政友会総裁田中義一との関係

犬養にとって政界からの隠退は、政界の人物たちにどう理解されたであろうか。西園寺公望の個人秘書のような役割をしていた松本剛吉は、犬養が三党合同に参加したことは、「別段之が為め反響も来さず、寧ろ世間よりは冷評を浴せられたる姿」であると見、このことを契機として犬養は「不日辞職又は引退の已むなきに至るならんと思はる」と推測していた〔註37〕。実際そうなるのであるが、隠退にまで至ると予想していたのは革新倶楽部内の一部の者以外では、あまりいなかった。というのは、犬養は政友会と合同さえすれば自分を信じてきた黨員に対する責任を果たすことができると考えていた、と一般的に思われていたからである。

したがって、1925（大正14）年5月10日に合同を決議したのちの同月28日、衆議院議員を隠退することを発表すると、その意外性に驚いた者もいた。その中の一人が同年4月14日に高橋是清の後継者として政友会の新総裁に就任した田中義一である。犬養の側近の古島は、政友会と革新倶楽部が合同する時から田中義一の政治的能力を評価していなかった〔註38〕ので、犬養も同じ考えであったものと思われる。

松本によると隠退を聞いた田中や他の政友会員は「狼狽」し、床次竹二郎の政友本党と

の合同を模索している。松本は、こう記している [註 39]。

犬養氏の隠退は政界に大なる波紋を画くに至るべしとは思はざるも、政友会には一種の衝動を与へたること勿論なり。左れば之を動機として同会は稍焦り気味となり、与党間の協調破綻を促進するに至るべく、延いて政局に波濤を捲起すべきは想見に難からざる筋合なりと思へり。

5月31日に、松本は田中義一から面会を「切望」されたため、いろいろ話をしている。最初、田中は近日中に興津の西園寺公望に面会する機会があるかどうかを尋ね、松本がそのようにする予定だと答えると、これから話すことを西園寺に伝えるよう要請したのち、次のように述べた [註 40]。

・・・今回犬養の辞職一件は実は自分へは更に前以て其話なし、然し二十七日犬養氏より通信大臣を辞職したき旨の話あり、自分としては議員迄も罷むることではないと心得、殊に政、革、中の合同の節犬養氏の話に自分は加藤首相に会ひたる時、合同問題の諒解を得且つ自分の進退に関しては追つて御相談すると申遣せし由の話もありたることなれば、早晚大臣の職は退く考なりと其当時より思ひ居り、又君よりの御話もありし次第故、犬養氏の大臣を罷めると云ふことは直ぐ賛成せし次第なりしが、大臣のみならず議員迄も罷むると云ふことは当時思はざりし、然るに大臣を辞職せば議員も辞するとの話を後で聴きし故一時は驚きたる・・・

犬養が大臣を辞任することは分かっていたが、それと同時に議員を辞職するとまでは考えていなかったと述べていることから明らかなように、犬養の議員辞職は周囲の者たちには唐突であったのである。大臣を辞職するという事だけでは、犬養の意図は単に革新倶楽部の党員に対して責任をとったと見えたであろうが、国会議員さえも辞職するということは犬養のただならざる決意のあらわれと理解されたであろう。そうしてこそ犬養を信頼してついできた政治家や支持者たちにも事態の深刻さが伝わったはずである。

田中は、そうした行動の筋書きは古島が書いたことであり、犬養はその筋書き通りに行動したに過ぎないと見ていた [註 41]。

之は古島にしてやられたることにて、犬養は口では大きな事を云ふが極く気の小さな男で、今日迄大を成さぬは其訳である故、無暗に留めることは良くないと心得、党の総務其他は引留を八ヶ間敷く云うたが、自分は左程意に介せざりし、段々留める者も出たが、遂に思ひ止まることは出来なかつた、犬養は国民より彼是言はれることを無上の楽しみとして今日迄来りたる人故、まあ、そんな事が仕度けりや勝手

にさせて置くが良からんと思へり。

田中は、犬養が「氣」が「小」さいために現在まで大きなことはできなかつたと指摘しているが、これは犬養を知る者たちが証言していることとは異なっている。確かに政界で大きなことはしていないが、それは、犬養の性格がある意味では「狭小」な上にその気性が激しいこと、それなりの信念を重視するためであることが原因であると言った方が適切であるように思われる。また、「国民より彼是言はれることを無上の楽しみとして今日迄来たりたる人」という指摘は間違っていないが、これは犬養が政治家として活動を始めて以来、常に世論に敏感であったことを指しており、その点については田中も理解していたということである。

犬養の性格が「狭小」であることについては、大隈重信や原敬、それに尾崎行雄らを始めとする多くの者たちが指摘している〔註 42〕 ことであり、このことについては犬養自身も隠そうとはしてない。問題は、性格がそうであったとしてもそれだけでは単なる頑固な政治家というだけで終わってしまう。一般的に政治家というものは度量が小さいというだけでは、犬養のように 40 年前後も国会議員をつづけ、しかも政界の中央で活動することは不可能であろう。しかも、当初は日本の代表的な政党の一つの領袖として、その後は小政党とは言えほぼその党首として活動してきたのであるから、性格が「狭小」というだけでは説明不足である。

確かに犬養は「狭小」であることを隠そうとしないことで、当初から犬養に接近する者たちを選ぼうとした節がある。したがって、問題は度量の小ささではなく、そのことを維持しつづけることを可能にしたその性格の「激しさ」というか「強さ」が大きく作用しているように思われるのである。

犬養の気性が激しく頑固であることは、幼少の頃から確認できた。幼少の頃や慶応義塾に通っている時のエピソードを挙げて、その気性が如何に激しいかを指摘する証言は数多くある。しかしながら、今回はそうした「狭小」さや「激しさ」というよりも、犬養のもう一つの性格が大きく作用したように思われる。それは、「情」に脆いということである。1930（昭和 5）年に息子の健は、この点を次のように指摘している〔註 43〕。

〔犬養は〕 敵に対しては無暗と鼻づばしが強く、味方一殊に長年の同志には恐ろしく脆い。こゝに犬養毅の秘密がある。熊の咽喉笛に弱点があり、土佐犬の足に弱点があるやうに、こゝに犬養毅の急所がある。もしもこの急所から超脱し得たならば、政革合同の際にも世間から見て、もつと歯切れのいい行動をとることが出来たであらう。また、一度隠退を声明しながら郷里から無理矢理に補欠選挙に当選させられた、あの場合にも、もつと歯切れのいい行動をとることが出来たであらう〔傍点原文〕。

このような健の指摘は、犬養をよく知る者は分かっていたが、そうでない者にとっては容易に理解し難いことであった。

また、政友会との合同に対して犬養と袂を分かって、合同に参加しなかった尾崎行雄も犬養の「情」について次のように証言している。犬養は若い頃からの尾崎の政治姿勢を厳しく見ていたが、一方の尾崎は慶応義塾を退学した直後から犬養と交流し、その後の重要な政治的事件に際しては、同僚として行動してきた仲であると共に、自ら犬養の「弟分」を任じている政治家であった。とくに革新倶楽部時代は、意見を異にする場面もあったが、共に参加していた〔註44〕。

犬養君が、国民党以来の子分をつれて、政友会に入ったことは、なんと言つても、理屈から言へば、大義名分の立たぬ行動であつた。しかし犬養君は元來、人情に厚い人で、悪く言へば愛憎の念が強かつた。・・・その時〔政友会との合同を決意した時〕、犬養君の政界における勢力は、政友会と憲政会とに圧せられて、次第に凋落し、とても志を得られるやうな情勢ではなかつた。人情家の犬養君は、それでは仲間に対してすまぬと思つたのであらう。全く人情のために、多年の主張を棄てて、政友会に入ったのであつた。

犬養君は、自分が政友会に入ることは、政治的生命の終結であることを、自分で知つてゐたと思ふ。

このように犬養を知っている者たちからすると犬養は決して気が小さいのではなく、どこまでも「情」に基づいて政友会と合同したのである。となると、田中が松本剛吉に述べた観察は正鵠を射てないことになる。やはり、犬養は自分が合同をして大臣を辞職したのちも政友会に国会議員として残れば、政友会に参加した者たちはいつか又もや犬養を中心とした政党なり派閥を形成できるものと期待し、そのことで彼らに政友会の政治家として半端な行動をさせてもならず、またそのことで彼らの党内での地位が危うくなってもよくないと考えたのであらう。

ところが、犬養はここまでの自分の考えを田中に明らかにしなかつたため、田中は松本に次のように述べたのである〔註45〕。

犬養が自分に対し約束する所に依れば、議員は辞しても政友会は脱会せぬ、旧国民党の地盤は随分ある故、之を政友会の地盤と為すことに尽力すと言ひ、近い内山口県九州等へ自分が出張する時は共に行くと言ひ居り、又支那に就いても南方には随分自分を信ずる者もある故政友会と共に事を為し近く支那に行くと言ひ居れり。犬養と共に入党せし革新倶楽部員は今回の犬養の挙動に対し大に悪感情を持ち居るも、事此に至らば益々結束して政友会の為めに尽くすと言ひ居れり。此事を御伝言

願ふと言はれしに依り、予は夫れは眉唾物ではないか、迂つかり乗つては可かぬと言ひしに、まあ嘘でもあるまいと思ふ、君、犬養の事を前より心配して御話し下さるが、私に対しては、さう不義理は出来ぬ、其訳があると笑はる（此は兼ねて聞居る○印ならんと思へり）。

ここで田中が犬養は「不義理は出来」ない「訳」があると言っていることの中身が何であるかは気になることであるが、明らかではない。実際この直後犬養は、自分の後任を選ばずの選挙で再度当選させられ、またもや政友会所属の国会議員となったが、それまでのようにはあまり表面的には活動しなかった。しかし裏面では政友会の長老として、求められれば田中にアドバイスをしたりしていたようである。また、中国からの要人の訪問にも積極的に応じていたようであるが、実際犬養はこののちも政友会のために行動したが、それは旧革新倶楽部系の政治家のためにもそうする必要があったからである。

註

- 1) 拙稿「岡山県下の革新倶楽部と政友会の合同前後における犬養毅と支持者たち」（『倉敷芸術科学大学紀要』第19号）133-146頁。
- 2) 拙稿「犬養道子との関係に見る晩年の犬養木堂—道子の証言を中心として—（Ⅰ）（Ⅱ）」（『倉敷芸術科学大学紀要』第20号）97-111, 113-129頁。
- 3) 古一念会編『鷲尾義直』古島一雄 全（日本経済研究会、1949年）653頁。
- 4) 山縣勝見『白林荘由来』（非売品、1965年）24頁。辰馬財閥の大番頭であった山縣は、戦後、第4次吉田内閣で法務大臣であった犬養健から白林荘を買い受け、そこで白林荘時代の木堂の心境をいろいろ推測している。山縣は詩歌に通じていた。
- 5) 原田庄左衛門宛犬養毅書簡、1922（大正11）年7月24日付（鷲尾義直編『犬養木堂書簡集』人文閣、1940年、376頁）。これは、1992年に岡山県郷土文化財団から復刻されており、本論文ではこれに依拠している。以下、『木堂書簡集』と略記。
- 6) 長尾雨山宛犬養毅書簡、1922年8月16日付、同上書、356頁。
- 7) 鷲尾義直編『犬養木堂伝』下巻（東洋経済新報社、1938年）767-768頁。これは原書房から1968年に復刻されており、本論文ではこれに依拠している。
- 8) これは『木堂談叢』（博文堂、1922年10月）であり、博文堂合資会社から刊行された。
- 9) 鷲尾義直編、前掲書『犬養木堂伝』下巻、776-780頁。
- 10) 三宅希峯宛犬養毅書簡、年不明8月2日付（岡山県郷土文化財団編『新編 犬養木堂新書簡集』同財団刊、1992年）132頁。以下、『新書簡集』と略記。
- 11) 三宅希峯宛犬養毅書簡、年不明7月27日付、同上書、133-134頁。
- 12) 三宅希峯宛犬養毅書簡、年不明9月6日付、同上書、133頁。
- 13) 山縣勝見、前掲書『白林荘由来』、51頁。
- 14) 同上書、同頁。
- 15) 原田庄左衛門宛犬養毅書簡、1922年11月20日付、『木堂書簡集』、376-377頁。
- 16) 古島一雄「富士見の白林荘」、前掲書『古島一雄 全』所収、656頁。
- 17) 古島一雄、同上、656頁。
- 18) 鷲尾義直「富士見隋遊記」、前掲書『犬養木堂伝』下巻所収、783頁。筆者は2006年夏に東京に出張した帰り新宿から特急に乗車し富士見で下車してみると、白林荘が建築された当時よりは建物や人の

数は増えているのかもしれないが、風景はいまでもそんなに変化してないような印象をうけた。その日はちょうど天候も晴れて、夏だというのに涼しく空気も澄んでおり、逗留させていただいた朝倉文一先生ご夫婦が歓待して下さったので、なおのこと快適に過ごせた。朝倉先生とは筆者が奉職する岡山県の大学の同僚教員の仲人をされたということであったが、その方が白林荘のすぐ近辺に転居されたということだったので、これも何かの縁だと考え出かけた次第である。先生のご自宅の前には小川平吉の別荘跡があり、今でも広々としていた。そこから先生に案内され富士見駅が見渡せそうな道を通り、ようやく白林荘に辿り着いた。と言っても、おそらく10分ぐらいであったろうか。入り口は清楚で砂利道を二、三分歩くと白林荘の玄関に着いた。私が訪れた時の管理人ご夫妻と朝倉先生が親しくされていたので、私も良くしていただき、別荘内を案内していただいた。そこでもっとも印象に残ったのは犬養が富士を見ていたという部屋である。スペースは広くなかったが、過ごしやすく作られており、一時期は他に移されていたという。しかし、現在では復元されていた。この西側の窓から富士を見ていたらしいが、現在では窓の外に鬱蒼と広がる白樺林が遮って、その当時のことを推測するしかなかった。しかし、この部屋で犬養が過ごしていたということを思いつつ感慨にふけることが出来たことは、感無量であった。また、白林荘の庭には、犬養が辛亥革命を記念して孫文から贈られた「白松」(本文図3)が植えられていたが、これを見た時、何とも言えない感慨に襲われたのを、今日でも鮮やかに思い出す。

- 19) 古島一雄、前掲「富士見の白林荘」656-657頁。
- 20) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年2月24日付、『木堂書簡集』、380-381頁。
- 21) 同上書簡、380頁。
- 22) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年3月10日付(『木堂雑誌』第14巻第1号〔1923年1月1日号〕63頁に掲載。本論文の註5の鷲尾義直編『犬養木堂書簡集』は、五・一五事件ののちに、全国から犬養が出した書簡を蒐集したものを、鷲尾が編集していた『木堂雑誌』に掲載したが、それらも所収されている)。
- 23) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年4月2日付、同上誌『木堂雑誌』同上号、64頁。
- 24) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年4月6日付、同上誌、同上号、65頁。
- 25) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年4月13日付、同上誌、同上号、同頁。
- 26) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年5月11日付、同上誌、同上号、66頁。
- 27) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年4月17日付、同上誌、同上号、65-66頁。
- 28) 樋口隆次宛犬養毅書簡、1923年1月21日付、同上誌、同上号、67頁。
- 29) 以下の記述は、古島一雄、前掲「富士見の白林荘」、657頁に依拠した。
- 30) 同上、657-658頁に掲載。
- 31) 三浦梧楼『観樹將軍回顧録』(中央公論社、1988年)361-385、463-479頁を参照。
- 32) この点については、前掲拙稿「犬養道子との関係に見る晩年の犬養木堂 - 道子の証言を中心として - (I) (II)」参照。
- 33) 鶴崎鷲城(熊吉)『犬養毅伝』(誠文堂、1932年)387頁。
- 34) 鶴崎熊吉宛犬養毅書簡、年号日付不明、同上書掲載、501頁。
- 35) この原敬の指摘は、川尻東馬「犬養毅君」(『太陽』第15巻9号、明治42〔1909〕年6月15日)113頁に掲載されている。また、犬養の頭の良さについては、政友会の総裁に就任した直後の1929年12月に政治評論家の馬場恒吾は、次のように書いている。「大抵の人間は馬鹿でほんやりで、頭が朦朧としてゐる。犬養の如き頭の鋭いのは稀だ。其癖、頭の朦朧としてゐる連中は、頭の良い人の所に往つて、自分の頭を改良せんと欲するよりは寧ろ頭の朦朧たる所に安住の境涯を見出さんとする。だから智者には友人が少ない。友人となるべき智者が、世間には少いからである。これが智者の悲哀である。犬養の政治的生涯の大半は、智者の悲哀を味つてゐる。だが政友会総裁としての彼は疑問だ。団体の大なる政友会には政策がない。犬養には政策湧くが如しだ。若し犬養の政策を政友会の力で行ふとすれば、政界の舞台は目が廻るほどの速力で回らるであらう。犬養に対する決定的の評価は其時迄保留しな

ければならぬ。」(馬場恒吾『現代人物評論』中央公論社, 1930年, 341頁).

- 36) 犬養健「父を語る－好奇心に答へて－」(額田松男『起てる犬養木堂翁』同刊行会, 1930年所収) 139-140頁.
- 37) 岡義武・林茂校訂『大正デモクラシー期の政治－松本剛吉政治日誌－』(岩波書店, 1959年) 400頁.
- 38) 古島一雄『一老政治家の回想』(中央公論社, 1975年) 217頁.
- 39) 前掲書『大正デモクラシー期の政治』402頁.
- 40) 同上書, 402-403頁.
- 41) 同上書, 403頁.
- 42) 例えば, 大隈重信「犬養毅と大石正己」, 三浦観樹「犬養といふ男」(いずれも前掲書, 鷺尾義直編『犬養木堂伝』下巻所収) 482-487頁.
- 43) 犬養健, 前掲「父を語る－好奇心に答へて－」137頁.
- 44) 尾崎行雄『峯堂回顧録』下巻(雄鶏社, 1952年) 231頁.
- 45) 前掲書『大正デモクラシー期の政治』, 403頁.

A thought on Tsuyoshi Inukai in his last years (I)
— Hakurinso, Sun Wen’s coffin transfer ceremony and
Seiyukai president —

Hideto TOKITOH

*College of Science and Industrial Technology
Kurashiki University of Science and the Arts*

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2015)

The objective of this study is to elucidate how important “Hakurinso cottage” was for Tsuyoshi Inukai, who spent some time in the cottage located in Shinshu Fujimi city of Nagano pref. just before his inauguration of the director general of Seiyukai party. Tsuyoshi Inukai, the politician assassinated in the prime minister office on May 15, 1932, had been a long-time key figure in the national political arena until his death except the short period between the end of Taisho era and the beginning of Showa period. The exceptional short period was, in some ways, a “blank period of politics” just before his inauguration of the director general of Seiyukai party, which was a large political party at the time.

Inukai at the time had been acting as a leader of a small party with their own highly ideal policy, called Kakushin Club (reformation club). This party had been dwindling, and he had no idea to break through the current status of his party. Therefore, he tried to save his party by merging with the large Seiyukai party. He sacrificed himself by even retiring from politics for taking the responsibility for letting his fellow politicians be the member of Seiyukai party, and for having a good rest for recovering from his long-time political activity. His intension was to spend the rest of his days in the Hakurinso cottage.

To build the Hakurinso cottage, he directed the construction by giving detailed instructions to his local agent in order to create a cottage very faithfully to his idea. It can be said that the cottage thus built with his tenacity of purpose represented his identity in a sense.

For him, it was a cozy place to recover his health and enjoy gardening, which was one of his hobbies. It seems that he was contemplating various matters regarding his political activity in the future, setting himself in this cottage free from what was going

on in the central political arena, in order to determine in which direction he should move on. On the contrary, the Seiyukai party to which he belonged raveled as time passed, and he was asked to be the new director general by a leading figure of the party. It can be said that this time he was dragged to the top of the Japanese politics, which had been a “far-off dream” for him.

In this respect, it was the Hakurinso cottage to give Inukai a chance to make a remarkable name for himself in his very last days.